

もどぶろく一ぺいどうだい。まだ少し残っているで。」と茶碗を突き出す者もいたし、ジロジロ嘉作を見つめる者もいた。体よく話合つて帰るときに嘉作は「久し振りに帰つて来たが何も皆さんにお土産もないし一つお土産のかわりに面白いものを見せましょう。俺がそこにある徳利の中にはいつて見せましょう。」これには皆も驚いた何ぼ何でもこの中に人がはいれる筈もないのにと見ているうちに嘉作さあは、それとていつうちに両足がはいった。そして、わが足数を数えながら腰胸頭まではいつて終つた。数の声^が、段々遠くなつてついに聞えなくなつた。皆がわいわいわい大騒ぎをしているところに、上の方から来た人が「何事だい。みんなしてよ」「いや今、嘉作さあが暫らく振りて帰つて来て、この徳利の中にはいつちまつて出て来ねえので皆で見つていたとこで」といつたら、その人が「何だ。俺、今向うで嘉作さあに逢つて久し振りだあつて立話して来たところだ。」徳利を取つて見ても嘉作さあはいないしその重みもない。嘉作さあは、キリシタンバテレンを習つて来たんだべえか。確かにこの徳利の中にはいつたのを皆で見つていたんだもんな。ま違げいなくはいつたんだ。

二、こんな話もある。

昔、伊達の長岡の天王様のお祭は天王糸市といつて、一年の糸相場はこの市で決まるとまで言われ、福島は勿論、宮城・岩手方面にまで出荷されるといふ大した取引がされたことは、知つての通りである。

そのお祭りは旧六月十四日であつた。暑い最中でもある。そのお祭りに甘瓜をポテ籠一杯にかついで来て売つている親爺がいた。だが他のところより高いのと不愛相なので、さっぱり売れないので、ポテ籠には朝来た時と同じに瓜が山と積まれていた。